1998 12 13 No. 50

主日礼拝順序

（待降節第３主日）

12月13日　午前10：15〜11：15

司会　藤村　洋執事

前奏		上杉直子姉
招詞		司会者
頌栄	５３９（起立）	一同
主の祈		一同
交読文	１２（詩４２）	一同
讃美歌	Ⅱ９６（起立）	一同
聖書	テサロニケⅠ５：１〜11	
	（共新378頁／初新438頁）	
牧会祈祷		岩井牧師
合唱	１０２	聖歌隊
説教	「目を覚ましていること」	
		岩井牧師
讃美歌	３２９（起立）	一同
献金		一同
頌栄	５４２（起立）	一同
祝祷		岩井牧師
応唱		聖歌隊
報告		藤村　洋執事
後奏		上杉直子姉

讃美歌練習　21－271　　阿部　恩兄

目を覚ましていること

テサロニケⅠ　５：１〜11

古来、イエスの来臨に心備えして、信仰を深めるための聖書テキストとして、テサロニケⅠ，５：１〜11は待降節に朗読されている。三つの事に目を注ぎたい。

第一。「主の日は来る」（１〜４節）ということ。これは旧約聖書アモス５：18によれば「主の日」は神の審判の日として示される。「人が『無事だ、安全だ』と言っているそのやさきに、突然、破滅が襲うのです」（３節）と言われる。これはエレミヤ６：14の偽預言者の「平和、平和」という気やすめの言葉は必ず破れるという思想の系譜である。「逃れられません」（３節）が鋭く響く。今、日本の状況で、この言葉は重く受けとめられねばならない。

第二。「わたしたちは昼に属しています」（８節）という信仰告白的宣言の鮮明なること。４節から10節までには古代の教会で言い表わされていた信仰告白の断片的言葉がいくつも繰り返されている。「光の子、昼の子」（４節）、「わたしたちの主イエス・キリストによる救いにあずからせるよう定められたのです」（９節）、「主は、わたしたちのために死なれました」（10節）等の言葉は、基本的に人間の現状ではなく、救いの現実の言葉化である。テサロニケの教会にも「ひどい苦しみ」（１章６節）はあった。しかしその現状は、「聖霊による喜び」（同６節）に包まれる現実として語られている。信仰は救いを理解することではない、関係そのものとしての救いを受け入れることである。「目覚めていても（生）、眠っていても（死）、主と共に生きる」と言われている。私たちにとって、どんな表現であれ、信仰告白は大切である。

第三。「お互いの向上に心がけなさい」（11節）。宗教が悟りや心の問題に終らないで、隣人への愛にまで展開することは言うまでもない。パウロは、救いの現実を語った、そのあとに続けて信仰から湧き出る実践を促す。「ですから」「従って」（４，６節）という接続詞におのずから力がこもっている。「目を覚ましていなさい」とは特別なことをする訳ではない。「あなたがたは、現にそうしているように」（11節）、信仰と愛と希望の生活を落ちついてしなさいとの勧めである。これは「信仰によって働き、愛のために苦労し、希望を持って忍耐している」（１章３節）の継続に他ならない。ハンセン病療養所の光明園家族教会津島久雄牧師は「この人々こそ、切々と主を愛し、教会に仕え、病友たちを主へと導いている」と語る。非日常における日常の奉仕に感動を覚える。私たちもそのように目を覚ましていたい。　（先週説教、岩井記）